

移民家族の「これまで」と「これから」
—越境する家族の複層的リアリティとその変容—

三浦綾希子（中京大学）

「日本の家族」は必ずしも「日本人」だけで構成されているわけではない。戦前から在日朝鮮人をはじめとする旧植民地出身者など「オールドカマー」と呼ばれる人たちは日本で家族を形成してきた。また、グローバル化の進行のもと、1970年代後半以降は「ニューカマー」と呼ばれる人々が様々な国から日本に移り住むようになり、家族とともに日本で生活をするようになった。このように、「日本の家族」のなかには、移民家族も含まれる。しかしながら、家族社会学の領域においては、こうした移民家族の状況についてこれまであまり目が向けられてこなかった。むしろ、移民家族がおかれた状況や直面する課題のなかには、日本人家族と類似したものもあるだろう。だが、移民家族であるがゆえの特徴や困難も確かに存在する。また、一口に移民家族といってもその内実は多様である。そこで、本報告では、これまで「日本の家族」の1つとして可視化されてこなかった移民家族の実情と、かれらが直面する課題について整理した上で、近年の移民家族の変化についてみていく。なお、本報告で扱うのは、70年代後半以降来日した「ニューカマー」の移民家族に限定することをあらかじめ断っておく。

まず、移民家族の多様な内実を把握するために、代表的な4つの家族形態（①両親とも移民の家族、②国際結婚家族、③移民のひとり親家族、④トランスナショナル家族）についてその特徴を概観する。特筆すべきは、②については、1980年代はじめに来日したフィリピンなどの東南アジア出身の女性のうち、エンターテイナーとして就労していた女性や農村花嫁として来日した女性が日本人男性と結婚し、家族を形成するパターンが多くみられたという点である。また、④のトランスナショナル家族とは、国境を越えて家族成員が愛情や義務で結ばれている家族を指す（Parreñas 2005）。子どもを出身国に残して親だけが日本に居住しているパターンや、片方の親と子どもが外国に暮らし片方の親が日本に居住するなどのパターンがある。

移民家族が直面する課題は上記の家族形態によっても異なるが、本報告では、夫婦間の関係、親子間の関係、拡大家族との関係の三つの観点から検討を行う。国際結婚家族については夫婦間の権力関係の非対称性が指摘されてきた。これは親子間の関係にも影響を及ぼし、日本人父が移民母の文化を蔑むことにより、子どもも母親の文化を否定することが起こりうる。また、子どもが日本生まれや幼いときから日本に居住している場合、子どものほうが親よりも日本語習得がはやいため、子どもが役所や病院での通訳を行い、ヤングケアラーになることがある。結果、親が移住先の生活で子どもに依存することによって親の権威が失われ、親と子の「役割逆転」（Portes and Rumbaut 2001）が起こる場合もある。さらに、出身地や日本に暮らす拡大家族は、子育てにおいて重要な資源になると同時に様々な葛藤を生み出す存在にもなることを移民家族の事例に即してみていく。

最後に、近年の移民家族の変化として指摘しておきたいのは、日本で育った第二世代が家族形成をはじめという点（三浦 2025）と第一世代の高齢化が進んでいるという点（清水ほか 2021）である。第二世代による子育て、第一世代の介護という問題を中心に移民家族の今後についても検討を行う。

参考文献

- 三浦綾希子（2025）「子育てをする移民第二世代—移民集住地区で育った南米系移民を対象に」『移民研究年報』31: 33-47.
- Parreñas, R. S. (2005) *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.
- Portes, A. and Rumbaut, R.G (2001) *Legacies —The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press.
- 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平（2021）『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店.

（キーワード：移民、国際結婚、トランスナショナリズム）